



**Data**

監督: マット・リーヴス

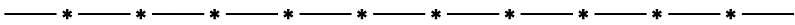
出演: アンディ・サーキス/ジェイ  
 ソン・クラーク/ゲイリー・  
 オールドマン/ケリー・ラッ  
 セル/コーディ・スミット=マ  
 クフィー/トビー・ケベル/  
 ジュディ・グリア/ニック・  
 サーストン/ジェームズ・フ  
 ランコ/カーク・アセヴェド  
 /ドック・ショウ/カリン・  
 コノヴァル

## 👁️👁️ みどころ

68年版『猿の惑星』の登場は衝撃的だったが、それから一回りした新シリーズでは、その映像技術にビックリ。しかし、権力闘争のサマは変わらず、やはり人間が考える限り、必然的にこうなるのかも・・・？

共存？ 支配？ それとも東西冷戦？ エイブ側に人間好きと人間嫌いがいるように、人間社会でも猿に嫌悪感を持つ人間が多いのは当然だから、それをまとめるのは至難の業。まして、そこに石原莞爾顔負けの「猿知恵」が働いてくれば・・・。

ある意味で必然のエイブVS人間の全面戦争と人間の敗北を経て、本作では意外な結末を迎えたが、さて、新シリーズ3作目は・・・？



## ■□■前シリーズから一回りし、『猿の惑星』は更なる進歩を！■□■

チャールトン・ヘストン主演の『猿の惑星』がはじめて登場したのは、1968年。私が大学に入学した翌年で、大きな話題を呼んだ。主演のチャールトン・ヘストンといえば、『十戒』（56年）や『ベン・ハー』（59年）で堂々たる主役を張った当時最強の俳優だが、その彼が言葉の語せない下等動物の姿で登場し、高い知能と文明を持つ高等動物たる猿にこき使われる姿は驚きだった。オリジナル・シリーズの『猿の惑星』は、『続・猿の惑星』（70年）、『新・猿の惑星』（71年）、『猿の惑星・征服』（72年）、『最後の猿の惑星』（73年）と続いたが、当時の世界情勢は「ベトナム戦争反対」一色になっていたことを反映して、それぞれかなり政治色が強く、かつ強烈に皮肉の効いたテーマが売りになっていた。

その後、1968年の名作『猿の惑星』をリ・イマジネーション（再創造）して蘇らせたティム・バートン監督の『PLANET OF THE APES／猿の惑星』（01年）は、その意気込みにもかかわらず、第22回ゴールデンラズベリー賞において、最低リメイク賞・最低助演男優賞（チャールトン・ヘストン）・最低助演女優賞（エステラ・ウォーレン）を受賞するという結果に終わり、単発で消えて行った。

しかし、ルパート・ワイアット監督の『猿の惑星：創世記（ジェネシス）』（11年）によって誕生した「特殊な遺伝子を受け継いで成長したシーザー」という新たなキャラクターによって『猿の惑星』は新たなシリーズが始まった。オリジナル・シリーズでも、ストーリー展開の面白さと共にスクリーン上にみる猿たちのリアルさがポイントだったが、新シリーズでの猿たちの映像上のリアルさは、ビックリするほど進歩している。しかして、本作はその『猿の惑星：創世記（ジェネシス）』の続編。つまり、『猿の惑星』は、前シリーズから一回りして更なる進歩を遂げた新シリーズが始まったわけだ。

## ■□■シーザー率いるエイプたちのコミュニティは？■□■

オリジナル・シリーズでは「猿」と呼ばれていた新興勢力は、新シリーズでは猿ではなく、「エイプ」と呼ばれるらしい。「エイプ」とは尾のない類人猿で、ゴリラ、チンパンジー、オランウータンなどを指し、尾のある猿である「モンキー」とは明確に区別されるそうだから、その点はきっちり認識を！しかして、本作導入部では、シーザー率いる多くのエイプたちがサンフランシスコ郊外の森の奥深くで巨大なコミュニティを築き、共同生活している風景が描かれる。

エイプ全員が人間のように自由に言葉をしゃべるわけではないが、小さく唇を動かす言葉使いと手話的な動きを併用することによって、意思疎通は自由にできているようだ。また、馬に乗っての移動、狩猟を行うについての軍隊式統率法などを見ていると、その知能レベルの高さは明らかだ。もっとも、武器として棒切れは振り回しているが、鉄砲、火薬はもちろん、弓矢もない。また、木材を組み立てた巨大な住み家はあるが、電気はないから、いくら知能の高いエイプといえどもまだまだ原始生活だ。

後にわかることだが、ここは約2000頭のエイプで構成されているコミュニティらしい。そのリーダーは妻のコーネリア（ジュディ・グリア）との間に、ブルーアイズ（ニック・サーストーン）という思春期の息子も生まれているシーザー（アンディ・サーキス）だ。ローマ帝国時代のシーザーは、元老院が設けられた民主主義制度でのリーダーだったが、エイプのシーザーはあくまで独裁者。良き相談役および顧問として仕えているオランウータンのモーリス（カリン・コノヴァル）とエイプ・コミュニティの将軍コバ（トビー・ケベル）の2人がシーザーを補佐しているが、私の見る限り、エイプ・コミュニティの統治体制は所詮原始社会だ。しかも、前作『猿の惑星：創世記（ジェネシス）』に見るように、シーザーはウィル（ジェームズ・フランコ）によって育てられたから、人間に対して親近

感を持っているのに対し、コバは人間に対して憎悪感を持っていたからやっかい。これでは、人間と遭遇しない限りは問題はないが、いざ人間とのトラブルが発生してくると、2人（2匹）の政策（対応？）の違いが鮮明になってくるのでは・・・？

## ■□■ドレイファス率いる絶滅寸前の人類は？■□■

それに対して、人間社会は、「10年前に世界中に拡散したウイルスの影響で、すでに人類の大半は死滅。ウイルスへの免疫を持つわずかな生存者たちは、荒廃したサンフランシスコ都市部のコミュニティに身を潜め、希望なき日々を生きていた」というのが本作の設定だ。こちらのリーダーはドレイファス（ゲイリー・オールドマン）だが、今、彼のリーダーシップによって復活させようとしているのは、生きていくための必需品たる電気。そこで目をつけたのが、森の奥地にあるダムを利用した水力発電。そのために森に派遣された技術者が、元建築家のマルコム（ジェイソン・クラーク）とマルコムの恋人で良き理解者のエリー（ケリー・ラッセル）さらにカーヴァー（カーク・アセヴェド）たち御一行だが、さあそこでハプニングが・・・。

本作のテーマである「人間とエイブとの共存か、それとも対決か」というストーリーが始まるきっかけは、マルコム「御一行様」がブルーアイズたちの一群と遭遇する中で、驚いたカーヴァーがブルーアイズに対して銃をぶっ放したことだ。第1次世界大戦は、1914年6月28日、暗殺団グループに属する1人のセルビア人がオーストリア・ハンガリー帝国の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の甥で皇位継承者であったフランツ・フェルディナント大公を銃弾によって暗殺した「サラエボ事件」で始まったが、それ同じように、それまで、別々のコミュニティで暮らし、互いの存在すら知らなかったエイブと人間がそれぞれ共存か対立かをめぐる選択を、この一発の銃声によって迫られることに・・・。

## ■□■人類にみる弱い者への侵略、征服の歴史は？■□■

15世紀の大航海時代の中で1492年にコロンブスが新大陸を発見するまでは、北アメリカの原住民は、平和を謳歌していた。しかし、1493年、1495年のインディアンへの大虐殺はひどいものだった。また、南アメリカのアンデス山脈で繁栄していたインカ帝国が、1532年にスペインによって征服された時の悲惨さも有名だ。

そして、それは台湾だって同じ。すなわち、国共内戦に敗北した国民党の蒋介石が1949年12月に台湾（島）に逃げてくるまでは、台湾の原住民は自分たちの文明を謳歌していたが、侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督が『悲情城市（悲情城市/A CITY OF SADNESS）』（89年）（『シネマルーム17』350頁参照）で描いた「二・二八事件」によって、原住民はひどい大弾圧を受けることに。また、魏徳聖（ウェイ・ダーション）監督が『セデック・バレ』（11年）で描いた「霧社事件」を観れば、日本統治時代の大日本帝国も原住民に大弾圧を加えていたことがよくわかる。

このように人類の歴史では、常に強い者（民族）が弱い者（民族）を侵略し、征服して

きたが、さて、ドレイファス率いる人間は最強の武器を使ってエイブを侵略し、征服することができるのだろうか？それとも逆に、人間はシーザーの下で統率のとれたコミュニティを形成しているエイブたちに侵略され、征服されてしまうのだろうか？

本作は「猿の惑星」といういかにも特殊な映画として成立しているが、見方によっては現在放映中のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』に見る人間ドラマと同じようなもの。さらに、詳細はわからないものの、現在その勢力を増してきている「イスラム国」に対して、アメリカを中心とする「有志連合」がどのように対応しようとしているかというドラマとも同じようなものだ。

## ■□■共存？支配？それとも、東西冷戦？■□■

私は歴史が大好きだが、それはヨーロッパでも、中国でも、日本でも、場所や時代を問わず、歴史の中にこそ権力をめぐる人間の本質が見えてくるからだ。しかし、本作を見ると、まだまだ原始社会ながら、エイブ内部の権力闘争の様相とエイブVS人間の対立の中で見せる権力をめぐるエイブの本質も、人間と全く同じだということがよくわかる。

人間の支配を目指すエイブは、人間に憎悪を持っているコバ。他方、エイブの支配を目指す人間は、猿への怒りを抱えているドレイファスだ。他方、互いの共存を目指すのは、シーザーとマルコム。それが単純な図式だが、これは現在の中国共産党の図式とも、アメリカ合衆国の大統領選挙をめぐる図式とも一致する。更に、現在最悪となっている日中関係をめぐる図式とも一致している。対立国の支配を目指すための戦争がちょっとした偶然やきっかけによって起きることは、第1次世界大戦のきっかけとなった「サラエボ事件」で明らかだ。もっとも、1939年9月1日のナチスドイツによるポーランド侵攻や、1941年12月8日（日本時間）の真珠湾奇襲攻撃に始まった対米戦争は、用意周到な準備を経ての決断だったが、さて、コバやドレイファスの目指す方向は？

ちなみに、第2次世界大戦終了直後の1950年代は、アメリカを中心とする西側陣営と、ソ連を中心とする東側陣営は「東西冷戦」状態にあった。その影響をモロに受けたのは「ベルリンの壁」を挟んで東西に分断されたドイツだ。そんな世界情勢を反映してジョン・ル・カレ原作の『寒い国から帰ってきたスパイ』（63年）等の名作が生まれたし、ジェームズ・ボンドが活躍する『007』シリーズでも、3作目の『ゴールドフィンガー』（64年）以降続く能天気な娯楽作ではなく、2作目の『007 ロシアより愛をこめて』（63年）のようなシリアスな内容になっていた。このように、共存とも支配とも異なる第3の道としての「東西冷戦」状態もありうるが、さて、エイブと人間が選択した道とは？

## ■□■この「猿知恵」には、石原莞爾も苦笑い・・・？■□■

前作『猿の惑星 創世記（ジェネシス）』では、ウィルのもとで子ザルから成長し、驚異的な知能を身につけていくシーザーが主役だった。それは本作でも変わらないが、本作中

盤からクライマックスにかけての波乱の物語、つまりエイブVS人間の全面対決の脚本を書き、その主人公になるのはコバだ。

1931年9月18日に満州の奉天（現在の瀋陽）近郊の柳条湖付近で発生した南満州鉄道（満鉄）の爆破事件が、その後の満州事変の発端になったことはよく知られているが、その脚本を書き、その主人公になったのが関東軍の作戦参謀だった石原莞爾だ。柳条湖事件が関東軍の「謀略」とされているのは、第1に爆破を中国軍の仕業と見せかけたこと、第2に、それを満州に攻め入る口実にしたことだ。そんな歴史的事実を知っていれば、エイブ・コミュニティの将軍たるコバが、本作でとった作戦と行動がまるでそれとそっくりであることがよくわかる。

人間コミュニティの武器庫に潜入し、警備係の人間を騙した「猿知恵」が巧みなら、奪った銃でシーザーを撃ち、エイブ・コミュニティに火を放ったうえ、それも人間の蛮行と見せかけ、人間コミュニティに攻め入る口実にしたのは、まさにコバの巧みな「猿知恵」だ。石原莞爾が柳条湖で採用した「軍部による独断専行と政府による事後承認」という手法は、その後も関東軍によって受け継がれたが、まさかエイブ・コミュニティにおけるコバの「猿知恵」として採用されたとは。これには、石原莞爾も草葉の陰で苦笑いしているはずだ。



猿の惑星：新世紀（ライジング） DVD発売中（2月4日発売）20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン  
(C)2015 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

## ■戦争回避は至難の業！しかも一度突入してしまえば■

最近私は自宅で東宝・新東宝の「戦争映画 DVDコレクション」を時々鑑賞しているが、それによると、山元五十六は「三国同盟」の締結と「日米開戦」にとことん反対したこと、そして真珠湾への奇襲攻撃に向かう際も、「宣戦布告」をしたか否かに最後まで気を使っていたことが描かれている。しかし、それにもかかわらず、日米開戦を回避できなかったのは歴史上の事実だ。大きく動く歴史の歯車は、いくら連合艦隊司令長官といえども（米内光政海軍大臣とのコンビの時は山本五十六は海軍次官）変えることはできなかったということだ。

それを考えれば、自己のリーダーシップによって人間との全面戦争をあくまで拒否していたシーザーが突如一発の銃弾で死んでしまい、エイブ・コミュニティに火が放たれてし

まった以上、あとはコバの煽動とコバのリーダーシップによって人間との全面戦争に突入したのは仕方ない。新たにコバが率いることになったエイブの好戦的な姿勢に対抗して、ドレイファスが人類を守るため、断固対決を呼びかけたのは当然だし、そのために立てた戦略・戦術も人間コミュニティのリーダーとして当然のもの。しかも、エイブのリーダーで人間の良き理解者だったシーザーが、人間が放った一発の銃弾によって殺されてしまうと、人間社会の方でもマルコムのような共存を目指す穏健派の発言力が弱くなるのは当然だ。戦争回避は至難の業！しかも、一度突入してしまえば・・・。

## ■□■このセリフに注目！この映像に注目！■□■

本作の中盤の展開においては、哲学的には(?)コバの「猿はいつでも強い猿に群がる」というセリフと、シーザーの「猿は猿を決して殺さない」というセリフの「対決」が面白いので、それに注目！他方、映像的に面白いのは、馬に乗ったコバたちが両手にマシンガンを持ち、これをぶっ放しながら人間コミュニティに攻撃をかけるシーン。人間からやっとの思いで銃を奪ったエイブたちが、いきなりここまで自由自在にマシンガンを操ることができるのは少し不自然。しかしまあ、これを迎え撃つドレイファス率いる人間との戦争シーンを盛り上げるには、最高の映像になっているから、それにも注目。

しかして、エイブVS人間対決の勝敗は？それは、そのために周到な準備をしたコバと、意表をつかれたドレイファスとの違いを考えれば明らかだ。その結果、人間は大きな檻の中に入れられ、モーリスやアッシュ(ドック・ショウ)たちコバへの反対勢力も同じく檻の中に閉じ込められてしまったから、以降はコバによる軍事独裁政権の1人舞台に・・・？

## ■□■アレレ、この展開はやっぱり映画なればこそ？■□■

本作ではシーザーの長男ブルーアイズが、ストーリー構成上それなりの役割を果たし、次男を産もうとしている妻のコーネリアもそれなりの役割を果たしている。それに対してマルコムの息子アレクサンダー(コーディ・スミット=マクフィー)はあまり具体的な役割が果たせていない。その母親のように付き添っている女性エリー(ケリー・ラッセル)も彼の母親ではなく、単にマルコムのよき理解者で、恋人という設定だ。しかし、いつも一緒にのテントで寝ているから、こりゃ内縁の妻・・・？それはともかく、実はこのエリーが医師だということがシーザーの妻コーネリアを助けるストーリーではもちろん、銃弾を受けたシーザーの手当て(手術)においても大きな意味を持つことになる。

エイブVS人間の全面戦争に突入した後にマルコムの自宅から手術用具を持ち出し、隠れ家でシーザーの手術をするという設定はちょっとムリ筋だが、本作ではそれでもシーザーの「復帰」が間に合うからアレレ・・・。しかも、エイブの全面攻撃を受けながら、ドレイファスや通信担当の人間は何とか地下に逃げ込んだため、エイブが占領している高層タワーの爆破という最終手段で対抗しようとしていたから、まだまだ、起死回生の人間生

き残り策はありそうだ。いかなる権力者でも、いったん権力を失ってしまうとその「復権」は難しいが、死んだと思われていたシーザーが見事に復活し、コバや多くのエイブたちの目の前に登場するとさて？そうなるとシーザーとコバの対決が不可避だが、さあそこでは、「猿は猿を決して殺さない」というシーザーの哲学はどうなるの？

爆破含みの高層タワーにおけるシーザーとコバとの「エイブ対決」は『猿の惑星』シリーズ特有の風景だから、それをしっかり楽しみつつ、問題の本質たる権力闘争の行方を、しっかり考えたい。

## ■□■コバは消えても、エイブVS人間の対立は？■□■

第2次世界大戦は、いわゆる日独伊三国同盟の「枢軸国」の敗北、米英仏露を中心とした「連合国」の勝利に終わった。そして、ドイツは東西に分断される悲劇を味わったが、日本はアメリカによる早期占領によって、からくもソ連の侵攻がごく一部にとどまったうえ、南北分断の悲劇を味わわずに済んだ。そんな視点で本作を見れば、コバのリーダーシップによって全面戦争を仕掛け、いったんは人間を支配したにもかかわらず、シーザーの再登場によってコバが死亡し、再びシーザーがリーダーシップを握ったが、シーザーは人間との戦争状態＝人間の占領体制をどう収束させるの？エイブ側はコバが死亡したため、再び人間にシンパシーを覚えるシーザーの独裁体制に戻ったが、ここまで人間と全面戦争をしたエイブたちに、今さら「人間と仲良くしろ」と言えるの？

他方、人間の方は、エイブ打倒をめぐってもドレイファスとマルコム路線や考え方は違ったまま。しかし、マルコムはあくまでシーザーとの個人的信頼関係があるだけで、人間コミュニティのリーダーはあくまでドレイファスだ。したがって、本作最後の名シーン、マルコムとシーザーが額を突き合わせ、互いの信頼感を見せつけながら、結局エイブ・コミュニティと人間コミュニティに分かれていくシーンとなる。

人間を軍事制圧し、占領したエイブたちは今、森の中へ消えていくべく隊伍を整えて進み始めたが、そこではセリフは全くない。しかし、シーザーをはじめ、エイブたちの顔には人間と決別した意志がハッキリと示されている。さて、この先エイブと人間は違う地域で、違う手法で共存・共栄できるの？それとも、東西冷戦状態が誕生するの？あるいは、第1次世界大戦の教訓があったにもかかわらず第2次世界大戦に進んでしまったバカな人間と同じように、更なるエイブVS人間の全面戦争になるの？新シリーズ第3作の構想に期待したい。



猿の惑星：新世紀（ライジング）  
DVD発売中（2月4日発売）  
20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン  
©2015 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.